

協働のかしわ情報発信チーム：

協働ってなあに？ 活動を聞きにいく(その5)【NPO×行政×地域子ども×学生×市民活動団体】

NPO法人 urban design partners balloon

今年の7月下旬から8月上旬、西原地域のふうせん広場で、地域子どもたち、大学院生、地元の市民活動団体等とカシニワ制度を使った「地域の庭」をつくる活動を行っているNPO法人 urban design partners balloon の代表・鈴木亮平さんを訪ねました。

balloonは、大学院で都市計画を学んでいた鈴木さんたちが、まちづくりの手法として発表した「たなカー」「ぷらっと」等の新しいアプローチで地域の課題を解決したいと立ち上げたNPOです。



2010年に柏ビレジで住民有志と社会実験を行ったのを皮切りに、11年に柏市のカシニワ制度を用いた事業を提案。翌年に柏市の協働事業提案制度に採用されます。以降、柏市を中心に香取市、南相馬市、いわき市（福島県）、日高市（埼玉県）ほかに活動の場を広げ、地域課題として「低未利用地利活用」「買い物

不便者対策」「郊外住宅地の活性化」「過疎地域の活性化」「農あるまちづくり」「地産地消」などに取り組んで来ました。

balloonがかかげるビジョンは、高齢化社会、環境配慮型社会を迎える中で、社会が縮小する過程をデザインし、必要とされる「機能」を動かして（＝たなカー）、「空き」をデザインする（＝ぷらっと）ことで、人口や都市の縮小の時代の豊かな暮らしを描こうというもの。



今回取材したふうせん広場は、住宅街の空き地を、その地権者さんとballoonを行政がカシニワ制度でつなぐことで、子どもから大人まで、多世代が触れあえる「地域の庭」として育てようとする試み。鈴木さんは、地域の子どもたちはもちろん、ご自身が講師をしている出身大学の院生や、地域で多彩な活動をしている市民活動団体のチームばんばん等と「協働」をする形で豊かな庭の創出を目指していました。

## 【協働のポイント】

(balloon 鈴木さんの話)

2014年に、カシニワ制度を使ってふうせん広場の活動を子どもたちと一緒に始めたんです。ヤギを連れてきて草を食べさせたり、子どもに花壇を持たせたり。そのうち子ども



もたちが中学、高校に進学して部活とか始まって広場に来られなくなって、昨年からは大学の学生を連れて来て、学生の勉強の場にも



なるし、カシニワの実験も続けられる。更に、チームばんばんさんが現れて、高齢者の憩いの場をつくりたいと。外で遊べる場が欲しいよねとか、お花を植えたいよねとか。お互いの最終目的は全然違うけれど、それでも成り立つのがまさに「協働」なのかな。必ずしも同じところを目指していなくてもいいんですよ。

ただその時、相手が何をやりたいのかをしっかりと理解することがたぶん一番大事で。それを理解していないと、お互いをすり合わせる事が出来なくなる。自分たちがやりたいことがあった時に、ちょっと手伝ってもらいたいとして、チームばんばんさんがやりたいことも用意しないとたぶん、一緒にやってくれない。それはお互い様なので、……お互いにアメをやりあっている感じ（笑）。

ちょっと言葉が悪いですが。（笑）

（チームばんばんの皆さんのお話から）

歌声サロンで知りあい気の合った人たちが、次第に地域で様々な貢献活動を手がけるようになってきた、というチームばんばん。代表の弓削規子さんは、「世代も考え方も違うので、お互いに学び合えるのが良い」と、balloonとの協働を喜んでいる。

ふうせん広場での作業が一息ついて、鈴木さんにインタビューをしていた時、ばんばんのメンバーの女性が箱いっぱいにご馳走を詰め込んでお持ちになった。たちまち賑やかな応答が飛び交いインタビューは中断。代



わりに、鈴木さんとは親子ほどもお歳の違うその方に、balloonのメンバーとの関わりを聞いてみた。

「私は、若い人たちと触れ合えてとってもいい。歳を取ると考えが固くなるから。」

——いいことがたくさんあるのはすぐに想像できるけれど、逆に難しいのはどういうことですか？

ちょっと意地悪な質問をした。

「分かりあうまでが難しい(笑)。若い方はおばさんが何を考えているか、わからないでしょ。」



——では、分かりあうには話し合いを重ねるとか？

「特に話し合いとかしなくても。……だって、勝手にお弁当とかつくるでしょ。美味しいね、とか。誰がつくったの？ とか(笑)」

そうだったのか。協働の極意は、この辺にあったんですね。

(取材・レポート:情報発信チーム 深津英雄・所英明)

◆NPO法人 urban design partners balloon

<http://www.tanacar.co.jp>